

151. イギリス近代都市計画成立期における都市協会論と先導的都市協会の活動に関する研究

Study on the discourses on civic societies and the activities of the leading civic societies in the formative years of the British town planning

中島 直人

Naoto Nakajima

The purpose of this study is to deepen our understanding of the characters of the civic society movement in the formative era of the British modern town planning from 1900 to 1930, by clarifying discourses on civic societies and works of leading civic societies at the time. Some discourses on civic societies in the journals related to town planning revealed that the essential roles of civic societies were supplements for governmental town planning and promoters of decentralizations in the British original context. The histories of the Liverpool City Guild, the London Society and the Birmingham Civic Society suggested that transitions of relations between local governments and civic societies in those 30 years were determining factors of their characters.

Keywords: civic society, United Kingdom, London Liverpool, Birmingham, city beautiful movement
都市協会、イギリス、ロンドン、リヴァプール、バーミンガム、都市美運動

1. はじめに

中島 (2008)¹⁾は、「シヴィック」の文脈という表現で、近代都市計画草創期に特徴的な市民意識とその英米での現代的継承、そして我が国での喪失の過程と再生の重要性を論じている。この論説中で、「シヴィック」的な市民意識に基づく具体事例として取り上げられているのが、イギリスの都市協会 (Civic Society)である。本研究は、この論説と同様の問題意識のもとで、イギリス近代都市計画成立期の都市協会の、個別の性格に留まらない包括的な特徴や活動の展開を明らかにし、イギリス近代都市計画史における「シヴィック」の文脈に関する理解を深めることを目的とする。

我が国では、西村 (1993・1997)²⁾³⁾が「ローカル・アメニティ・ソサイエティ」の歴史を紐解き、中島 (2005)⁴⁾は都市協会の活動と密接に関わるオープンスペース保存運動について詳述しているが、本研究の対象時期の都市協会には特別な注意を払っていない。中島 (2008)¹⁾や中島(2009)⁵⁾はシティビューティフル運動の伝播という観点で、バーミンガム都市協会やリヴァプール都市組合に言及しているが、都市協会の活動の全体像や史的展開は捉えていない。

イギリスの都市計画史研究においてもこの時期の都市協会への言及は少ない。通史的著作では、Cherry(1974)⁶⁾がロンドン協会の活動に僅かに言及しているだけで、都市協会について詳述したものはない。個別の都市の都市計画史研究でも、例えばCherry(1994)⁷⁾が「バーミンガムのコミュニティの指導者による都市の満足感や現代的イメージの増進の努力」の一例としてバーミンガム都市協会に、Crouch (2002)⁸⁾がリヴァプール都市組合の成立過程について簡単に言及するといった程度に留まっている。一方で、1957年に都市協会のネットワーク構築を目指して設立されたシヴィックトラストによる『都市協会運動』⁹⁾は、1920年代初

頭に10程度の都市で都市協会が存在していたと記しているが、その活動の特徴には言及していない。King(1987)¹⁰⁾はこの時期の都市協会を主題とした唯一の既往研究であるが、その目的は「都市協会の全体の歴史を追うことではなく、都市協会自身が設定した目的とその形成を取り巻く状況、その草創期におけるイベント等により与えられた活動を展開させる機会について考察を加える」ことであり、都市協会の活動の展開の史的な整理はなされておらず、成立途中のイギリス近代都市計画との関係の考察も十分でない。

本研究では、以上の状況を踏まえて、都市協会同士の連携や共通の目標の解明を念頭におき、当時の都市計画関係雑誌¹¹⁾に掲載された都市協会の特徴や活動の展開可能性に関する包括的な論考の分析と、他の都市協会を先導していた可能性が高い特定の都市協会の活動展開の把握という二つの視点から、イギリス近代都市計画成立期の都市協会の特徴、活動の展開に迫る。都市計画関係雑誌の他、各都市協会の機関誌、年次報告書、議事録を資料として活用する。

なお「都市協会」は、都市環境に対する地域のニーズに応えることを目的として活動するボランティア組織である。また、「イギリス近代都市計画成立期」は1900年代から1930年頃までとするが、この期間設定は、イギリス都市計画が1909年の住居・都市計画等法において都市計画スキームとして法的認知を得た後、1932年の都市・田園計画法により計画対象区域が自治体全域に拡張され、「都市計画が文字通り『都市計画』になった」¹¹⁾という史観に拠っている。

2. 都市協会論と先導的都市協会

2-1 都市計画系雑誌に見る都市協会論

イギリス近代都市計画成立期における都市協会の特徴や活動展開に関する包括的な論考は、『都市計画批評』の1919

年4月号のP. アバークロンビー (リヴァプール大学シヴィックデザイン学部教授) の論考¹²⁾、1923年の『社会学批評』のS. ブランフォード (ロンドン社会学会都市委員会) の論考¹³⁾¹⁴⁾、『都市計画批評』の1923年9月号のW. ヘイウッド (バーミンガム都市協会名誉幹事) の論考¹⁵⁾がある。

2-2 アバークロンビーの都市協会論¹²⁾

リヴァプール都市組合の草創期からの主要会員でもあったアバークロンビーは、都市協会と行政との関係に紙幅を割いた。強調したのは、行政があらゆる発展計画の主体となるべきで、都市協会はそれを補完する役割を担うという点であった。そうした説明に加えて、セントルイス都市連盟を代表とするアメリカにおける活動的な市民組織を例に挙げながらも、政治的汚職の横行、メリットシステムとされる議会といった特殊アメリカ的状况を持たないイギリスにおいて、なぜ非党派的な都市協会が必要なのか、という問いに対しても、地方行政にまで中央政府の影響を及ぼようになった中央集権的な状況の改善を理由として提示した。戦時中に実施された過度な中央集権に、地方のパトリオティズムの喪失、一点集中型組織の脆弱性を見てとったアバークロンビーは、都市協会の活動によって市民意識が高まり、地方の発展の基礎となる地方分権が進むことを期待していたのである。ただし、都市協会と全国レベルの組織との連携は、活動の質の確保という点で必要であるとした。

また、活動エリアについては、すでに市街化が過度に進んでいる大都市で先に運動が展開すること、行政界よりは自然な地域 (region) を対象とすべきこと、協会の目標については、機能をコミュニティの生活の物的側面に限定し、純粋に商業的、社会的な問題は他の組織に任せるようにすること、都市計画法がうたう衛生、アメニティ、利便性が都市協会の活動の基本となることなどを提案している。

活動の手段としては、1 都市地域調査、2 総合計画、3 常設・臨時委員会、4 芸術審査会、5 区・地区組織を挙げた。中でも、1の都市地域調査については、都市協会の提案に対して行政の真剣な検討を引き出すための、最も基礎的な活動であるとして重視した。専門官僚ではなく、都市協会が実施することで、調査自体の一般へのアピール効果、行政に不都合な点の解明などの利点があるとした。また、4についてもアメリカの芸術委員会の活動を解説しつつ、極めて重要な仕事であると言及していた。

組織構成については数よりも人選こそが都市協会の重みにとって重要と、注意を喚起した。また、すぐりかかるとすべき事項として、戦争記念碑とともに、コミュニティのニーズを探り、行政が取り組んでいる都市計画や住宅計画が正しく実行されるようにすることを挙げた。

アバークロンビーは、全国組織との連携や活動エリア、区・地区委員会の有効性を示すために、リヴァプール都市組合の活動を紹介した。総合計画については、ロンドン協会の大ロンドン発展計画をあげた。設立直後のバーミンガム都市協会については、「趣きの問題の特定の権威として出しゃばるのではなく、趣きが問題としてとりあげるべきも

のであるということを主張する」という発言を弱腰過ぎるとして、より強気の活動を鼓舞した。

2-3 ブランフォード夫人の都市協会論¹³⁾¹⁴⁾

P. ゲデスの愛弟子のV. ブランフォードの夫人S. ブランフォードは、1923年3月のロンドン社会学会都市委員会主催の都市協会会議²⁾の前後に、二つの論考を著した。

前者¹³⁾は都市協会会議に向けて、「都市協会運動」の具体例を紹介する内容で、その起点を1905年の社会学会でのゲデスと新聞記者とのやりとりの中での自発的結社の思想に置きつつも⁹⁾、運動はロンドン協会が先導したと述べた。そして、都市計画の促進、田園都市の原理の利点へ注目したりヴァプール都市組合、土地購入を積極的に実施しているバーミンガム都市協会をまず紹介し、その後、リーズ都市協会、リッチモンド都市協会、ノッチングハム都市協会、ダブリン協会、プロ・エルサレム協会などにも言及した。

後者¹⁴⁾では、ブランフォードは、都市協会の目的を「物的環境が再興に値するそれ自身の伝統を最大限に発揮し、発展させることで、各地域、地区のために各都市に文化の中心をつくること」とし、その背景に、現代のコミュニケーションの容易さがもたらす過大な中央集権化、地方の特色の喪失による単調化と同一化の傾向、中央政府による地方の自由への抑圧、地方性への関心の欠如等、つまりは市民意識とプライドの喪失という事態を見てとっていた。

さらに、ブランフォードは「現代の都市は、コミュニティではない。それ自身を表現する中心の炎が消えている。」と危機を論じ、市民意識をイタリアの中世都市、ギリシャの古代都市と結びつける一方で、「地方の忠義の古代的な概念をキリスト教の伝統によって現代のわれわれのものに転換して新しくすること」が都市協会の仕事だとした。「都市協会は、このように都市の精神とよぶかもしれないものを発見し、維持し、発展させるために存在している。その精神は、必然的に都市そのものと同様に多様なものであるが、共通のチャンネルを通して、表現される必要がある。」とし、都市の物的環境の重要性、公共性に言及した。そして、都市協会にとって調査は基本であるとした。この論考では自身が創立に関与したリッチモンド都市協会が、都市協会内の委員構成の例としてわずかに言及されるに留まった。

2-4 ヘイウッドの都市協会論¹⁵⁾

ヘイウッドは、「都市改善の外観表現の現代的発展」の中に、都市協会を位置づけた。アメリカにおける芸術委員会を中心とした都市改善の動きについて論じた後、「都市改善はこの国では都市協会の領分である」として、都市協会の端緒としてリヴァプール都市組合、更に素晴らしい仕事をしているとしてロンドン協会の活動を紹介した。

ヘイウッドは、地方都市での都市協会の活動の困難さを指摘しつつ、「世論が都市のアメニティへの関心の増大へ方向転換している」と指摘した。そして、都市協会がとるべき方策として、1. 明らかにアメニティに好意的な政策を持つ議員の支援を要求する運動をおこす、2. 現在の状況が確かな目標に向かっているならば、既存の状態において

諮問機関として機能する、の二つがあり、アメリカでは1の方法が有効であるが、イギリスではイギリス人の心性や行政の状態からして、2の方法を採用すべきと論じた。

そして、こうした一般的な説明のあとに、バーミンガム都市協会について、大規模な組織を目指さないという点と、特にここでいう二番目の方法をバーミンガム芸術諮問委員会で実践していることを中心に、その活動を紹介した。

2-5 都市協会への期待と3つの先導的都市協会

以上のように、都市協会の活動に実際に関わっていた3人による、都市協会の活動にも影響力を持ったと推測される⁽⁴⁾都市協会論に見られた共通の見解は、①都市協会に期待しているのは行政の補完的な働きであり、行政との協働であること、②中央に対抗する地方の価値、特殊性を強く意識していること、③アメリカの動向を意識しながらも、イギリス独自の文脈の中で思考していることであった。また、ゲデスの影響を強く受けていたアバークロンビーとブランフォードが地域や調査の重要性を説き、同時にアバークロンビーとヘイウッドはアメリカの芸術委員会を念頭に、都市の外観の改善に直接的に関与する仕事の重要性を説くなど、近代都市計画の潮流としてあった地域調査・計画運動やシティビューティフル運動の影響下で、都市協会の役割が検討されていたことも読み取れる。

そうした中で、広く紹介すべき都市協会として3名ともが採り上げたのが、リヴァプール都市組合、ロンドン協会、バーミンガム都市協会であった。都市計画関係雑誌での紹介回数や内容からしても、この3協会が他の都市協会を先導していた可能性が高い⁽⁵⁾。ただし、リヴァプール都市組合は1920年、ロンドン都市協会は1924年が最後、それに対してバーミンガム都市協会は1918年の創立以降、1920年代を通じてという紹介時期の違いに注意する必要がある。

3. 各先導的都市協会の活動の展開

3-1 リヴァプール都市組合⁽⁶⁾

(1) 設立経緯と初動期の活動

1906年11月、1848年設立の地域の建築家たちの集まり

であったリヴァプール建築協会の部会にて、シティビューティフル運動の実施が提案され、既存諸団体の支援でシティビューティフル協会が結成された。1907年6月にはシティビューティフル会議が開催された。会議では、一日目は「都市田園計画」がテーマで、諸外国の都市拡張の事例紹介、新規開発エリアの問題、リヴァプールの将来に関する発表、二日目は「田園都市」に関する議論が行われた。このような都市計画の生成の気運の中でのシティビューティフル運動の盛り上がりや背景として、1909年3月にシティビューティフル協会、樹木保存及びオープンスペース協会、リヴァプールカーン協会オープンスペース部会の3団体の合併により、リヴァプール都市組合が設立された。

組合長には、この地方の大土地所有者であった元首相のソールズベリー侯爵が就任し、一般委員会の議長にはリヴァプール市長、さらに運営委員会の委員にはリヴァプール大学のシヴィックデザイン講座の初代教授であるS.D.アドシード他、24名が選ばれた。1910年4月の時点ですでに会員は200名ほど集まっていた。リヴァプールの市内、及び周縁部を8つの地域に分け、それぞれの地域の情報を集め、運営委員会に対して提案を行う地域委員会を設置した。前身団体である樹木保存及びオープンスペース協会から190ポンドの資金を継承し、活動を開始した。その目的は、表1で示したように、公共的関心を維持することであった。

設立初年度は、ゲデスを講師とした「都市調査」の検討や一般向けの講演会開催などの活動を行ったが、その焦点は、市当局と合同で設置する委員会を母体として、1909年制定の都市計画スキームによって、郊外的美観を保全しながらの秩序ある発展を実現することにあった。1913年4月の総会において、都市組合の努力によってリヴァプール周縁部の自治体において都市計画スキームが適用されることになったと成果が報告された。リヴァプール都市組合の初動期の活動は、都市計画の創成と密接な関係にあった。

(2) 活動の転換と第一次世界大戦

都市計画スキームの導入に伴う市当局への支援が一段落した1913年、リヴァプール都市組合は活動方針を再考し、

表1 イギリス近代都市計画成立期の先導的市民協会

名称	リヴァプール都市組合	ロンドン協会	バーミンガム都市協会
正式名称	The City Guild for the Preservation and Increase of the Natural and Structural Beauties of Liverpool and District and for the Advancement of the Fine Arts	The London Society	The Birmingham Civic Society
設立	1909年3月	1912年2月	1918年6月
活動趣旨	この都市及び活路の自然美、人工美の保全や増進を、公共団体への陳情や必要と可能に応じて、公共的なアソシエーションや民間の努力によって支援することである。以下のような観点において、一般的で効果的な公共的関心を維持することを狙いとしている。 ●自治体ないし他の団体が進める改善計画 ●古い街区の再建と新しい街区の布設 ●歴史的なモニュメントの保護 ●公園の布設とオープンスペースの保護 ●提案された公共施設の性格や位置 ●樹木や樹木保護、シートの設置 ●芸術作品の選定 ●音楽公演の支援 ●広告板、指示板、その他広告物の制限 ●窓際のガーデニングの奨励 ●煤煙やその他の不快物の軽減 そして、都市や地方の外観の美観に関するあらゆる事柄について	ロンドン協会の目的は、ロンドンを愛する人々を、古くからの魅力の保全に関心を持つか新しい開発に関心を持つかに関わらず、結びつけること。ロンドンは世界で最も偉大な都市で、現在の状況や将来の成長を考えると、アメリカや大陸のすべての都市を後引に促す存在である。 ロンドン協会の狙いは、強い公論をつくり、ロンドン市民が芸術的、古物的、実用的な関心を持つ事柄に関する影響力を持つ手段を提供し、共同の活動によって、明確で、この偉大な都市に恒久的に役立つ何かを達成することができるようにすることである。 ロンドン協会の手段は、その力の限りであらゆる手段を用いて、(案を支援し、間違っていない) 間接に案のすべてを意味を、手選りになる前にロンドン市民に伝え、結果として、責任ある人々にその案を修正や廃止する圧力を与えることである。協会は、会員が実用的な権威と同様に、芸術的な検討においても十分に主張ができるように、情報を集め、提供する。われわれの都市をコントロールする種々な機関との協力関係の必要性は強調されるだろう。	1 都市の歴史に関する関心を喚起し、歴史的価値のある建物やモニュメントを保存する。 2 全ての美しいものを保存し、全ての破壊行為が許されずに警戒させる。 3 美のセンスを向上させ、地域の建物、オフィス、倉庫、工場などに高水準の建築を採用することを実現し、市民の地域、都市生活における誇りを刺激する。 4 より美しい都市のため a 公園やパークウェイ、広場、庭園、交差点における装飾など、レクリエーションの目的に使用するために、空地を公共で獲得することを主張する。 b 都市計画から公園、橋梁、噴水、記念碑、シェルター、ベンチ、街燈、トラム線路などのデザインに至るまで、市当局によってコントロールされる各種のスキームや事業に対するアドバイスを行う。 c 教育委員会や地域の芸術の発展のための訓練組合と協力し、共通の目的を有する建築、エンジニア、芸術、工芸などの組合など既存の協会の任務の調整を支援する。 d 他団体の事業への関与に加えて、協会自身が実行するプロジェクトを選択する。 e 新聞や、展覧会、講座、コンパなどを含むその他の宣伝手法を用いて、これらの目的の実行に努める。
組織構成 組織規模	役員【1915年7月時点】 会長:ソールズベリー侯爵/副会長(12名)/一般委員会(43名) 会長:リヴァプール市長/運営委員会(24名) S.アドシード(ロンドン大学教授、元リヴァプール大学シヴィックデザイン学部教授)、P.アバークロンビー(リヴァプール大学シヴィックデザイン学部教授)、C.ライリー(リヴァプール大学建築学科教授)ら 会員 【1910年4月時点】200名程度→【1914年末時点】220名程度	役員【1913年10月時点】 会長:プリマス伯爵/副会長(24名)/評議 会長 A.ウェップ(元建築学会会長) 委員(18名)+王立アカデミーや王立芸術協会、王立建築協会、王立彫刻家協会などの代表委員(12名)/運営委員会(26名)/議会委員会(24名) 会員 【1915年時点】生涯会員20名、一般会員341名 →【1924年8月末時点】生涯会員120名、一般会員1112名(団体含む)	役員【1918年時点】 会長:プリマス伯爵/副会長(10名)/評議会(28名)/技術委員会(8名) /名誉幹事 W.ヘイウッド 会員 【1926年時点】330名→【1934年時点】250名
主要紹介記事	●(1910). The Liverpool City Guild, Town Planning Review, 1(1), pp.84-86 ●(1913). Liverpool City Guild, Town Planning Review, 4(1), pp.67-69	●(1916). The London Society, Garden Cities and Town Planning, 6(3), p.54 ●(1921). Future of London, Town Planning Review, 9(2), pp.133-134	●Haywood W. (1923). The Birmingham Civic Society, Town Planning Review, 10(3), pp.171-180 ●Haywood W. (1926). Control of Design, Journal of the Town Planning Institute, 12(5)

活動の比重を公共モニュメントの内容や位置の検討に置くことになった。具体的には、キング・エドワード7世の記念碑をセントジョージホールの前に建設しようとする市の計画について小委員会を設けて検討し、セントジョージホール周辺は現状維持とし、別の場所での建設を提案したのである。最終的にこの提案は、ほぼ実現することになった。

ただし、引き続き、郊外部での具体的な住宅地開発や森林、丘陵地の保存にも関与していた。また、1913年7月に売りに出されたリヴァプール郊外のマウントハウスの購入や、新たにリーバー卿が購入したリバティハウスの活用提案、街灯の設計競技、都市計画展示会への参加など、積極的な活動を展開した。しかし、1914年8月にイギリスの第一次世界大戦参戦によって、紙の統制のためレポートも発行できなくなるなど、組合活動が制約されるようになった。

戦時中の1916年1月、ロンドンにて都市芸術協会(Civic Arts Association)が設立された。「どの町もそれなしでは創造、拡張、改良していくことができない、それなしでは理性的な関心が町や村で授けられない、維持されない、そんなシヴィックアートの改善」¹⁶⁾を目的とした全国組織であった。リヴァプール都市組合は、1916年末、都市芸術協会の目的が組合のそれと非常に近いとし、同協会と同盟契約をむすんだ。以降、毎年、同盟費を払い、都市芸術協会出版物の提供や、記念碑に関するアドバイスを受けることになった。1915年7月時点での都市組合の運営委員会委員22名のうち15名が、1920年末までに都市芸術協会会員となった。

その他、1916年中には教育委員会との連携によるワイアーバスケットの設置や、危機にさらされた樹木の保護などの活動を行った。1918年にはロンドン協会からの提案を受けて、都市協会の設立を促進するための雑誌発行の検討を進め、ロータリークラブとの間で“City Magazine”の発行を企画したが、実現には至らなかった。この時期、1918年に新設されたリーズ都市協会やバーミンガム都市協会の相談に乗るなどの先導的な活動は展開していたが、戦時中の停滞の提供は大きく、都市組合自体の積極的な活動は影を擧げた。『都市計画批評』誌でも活動への言及はなくなった。

(3) 活動の停滞と解散

1932年に作成された活動報告¹⁷⁾によれば、1920年代以降の主な活動は、歴史家ウィリアム・ロスコーに関する講演と印刷物の配布(1923年)、リバティビルディングの保存資金提供(1926年、1931年)、リヴァプール少年協会への運動場関連支援(1931年)、新設されたシティ・ビューティフル協会への参加と出資(1930年)などであった。

1930年11月の運営委員会では、都市組合の仕事を全て閉じ、資産をトラストに預けることが検討されたが、実現しなかった。結局、1937年に新設のマーシーサイド都市協会に資産を全て移管することで都市組合は活動を停止した。

3-2 ロンドン協会⁷⁾

(1) 設立経緯と初期の体制構築

ロンドン協会は1912年1月2日にホルボーン・レストランで開催された、「ロンドンの芸術的發展とその美や性格の

保全に大いに関心があり、同様の関心を持っている人々を皆集めて、重要な計画が議論されている時に、行政が無視できないような強力な意見団体をつくるという希望を持っていた」¹⁸⁾人が集まった会議を発端として、1912年2月9日に創立が認められた。その当初から都市委員会と街路委員会の二つが設置された。前者は公共のアメニティや土地所有の状況、その制限の可能性、議会にかけられる前の全法案の検討、一般スキームが承認される前に要求される法や税の必要な修正などを扱った。後者はすべての地方機関の計画を検証し、提案される改善を記録し、新しい原理をロンドンにて確立する努力を行うことを目的とした。その後、都市委員会が改称して街路・建造物委員会となり、他にも大ロンドンメモリアル委員会、オープンスペース委員会、サウスサイド委員会、リヴァプール都市組合と同様にロンドンを9つに分けた地区別の小委員会から構成される地域委員会などが設立され、積極的な活動を行った。

こうした委員会活動を束ねるロンドン協会は、副会長に34名の名士が名を連ね、評議会は建築学会会長も務めたA. ウェップを議長として、18名の委員と12名の団体代表者で構成され、さらにその下に、運営委員会、議会委員会を持つ巨大組織であった。会員数も、1915年の時点で、20名の生涯会員、341名の一般会員を数えた。また、会員の中にはロンドン近辺以外の在住の会員もいた。運営委員会にはリヴァプール都市組合でも運営委員会の委員を務めていたアドシード(1914年にリヴァプール大学からロンドン大学に移籍)らが名を連ねていた。1913年10月には、月刊の機関誌として『ロンドン協会雑誌』を創刊した。その購読料によって協会の財政面は強化されることになった。

(2) 大ロンドン発展計画と『明日のロンドン』

1914年の第一次世界大戦勃発は通常建設活動を休止させた。そのため、建築関係者の失業対策、戦時中の国家貢献という観点から、建築関係者からも「都市調査」が推奨されるようになった。ロンドン協会はこれを受けて、戦時中の目標を「将来の大ロンドンの改善のために大いに必要とされる開発計画の用意」¹⁹⁾とし、ロンドンを6つの地区に分け、都市調査を実施するガイダンス委員会を設置した。ウェブが全体の議長をつとめ、各地区はアドシードら専門家が担当した。プリンス・オブ・ウェールズファンダや芸術家一般博愛協会、建築家博愛協会、各方面の個人から集めた多額の寄付で製図技術者を雇い、作業を進めた。『ロンドン協会雑誌』では、「パリでオスマンが芸術家たちの提案を採用したように、ロンドン計画が活かされることを期待している」²⁰⁾として、オスマンのパリ大改造の下敷きとなった建築家、芸術家、エンジニアたちによる自主的なパリ改良計画案が一種のモデルとして紹介された。

最終的には、1919年に、「大ロンドン発展計画」として調査結果は公開された。ロンドンの15マイル圏内の地域の地図を作成し、そこに、地方当局が合意した幹線道路やバイパス、協会が自主的に提案した道路や公園、パークウェイ、オープンスペースなどを描ききったものであった。展

覧会も開き、大きな反響を得た。たとえば、ロンドン住宅審議会は新規住宅地開発の申請の際、この地図を使って、提案された幹線道路や一般開発プランとの関係を検討した。

また、1921年には、識者がロンドンの将来について自由に論じた原稿を集めて、『明日のロンドン』²¹⁾を出版した。協会が設立以来、検討してきた諸問題への見解も数多く含まれていた。この書籍も大きな反響を呼んだ。例えば、『都市計画批評』では巻頭²²⁾でその出版が取り上げられ、クリストファー・レンのロンドン改造計画と違って、「世論の存在」があること、ロンドン協会がこの計画を受け入れ、実行していく市民の育成にも取り組んでいることを強調した。

このような調査提案、出版活動によって、ロンドン協会の信頼は増した。協会自身、「ロンドン協会の登場は明らかにイングランドの他都市で同様の動機を持つ人々の感情を目覚めさせ、バーミンガム、リーズ、グラスゴーで同様の協会が設立されたばかりで、ハダースフィールドは準備中、シェフィールドも戦争前に開始した。(中略)我々のような中央の協会との連盟はお互いに利益があると思わざるを得ない。」²³⁾というリーダーシップを打ち出すようになった。

(3) 1920年代の多様な課題への関与

戦時中の仕事で勢いをつけたロンドン協会の新規入会者数は、1920年度198名、1921年度223名、1922年度167名、1923年度248名、1924年度249名で、会員は急増した。講演や現地視察、リバートリップ、年次ディナーといった定期的な活動に加えて、様々な団体と協働しながら、保全や開発に関係する多様な問題提起、提案に取り組んでいた。

特に最大の関心は、1910年代から取り組んでいたテムズ河の橋梁の話題であり、既存計画を批判し、独自提案を行った。中でも、テムズ河の南北間の交通、交流という視点から、当局が計画していたセントポール橋の架橋は交通流を増やすだけだと反対し、イギリス王立建築協会とともにチャンリングクロス橋の架橋を強く提案した。この問題は1920年代の内には決着が付かず、運動は継続された。

また、この時期には、新規開発の用地として失われゆくスクウェアの保存運動にも、首都公共公園協会とコモンズ及び歩道保存協会と密接な関係を築きながら積極的に参画した。個別開発への反対のみならず、1927年には『ロンドンのスクウェア その救い方』²⁴⁾という冊子を出版し、広く世論の喚起に努めた。協会は、都市計画の権限を既存市街地へ拡張することでスクウェアを守ることを主張した。

他にも、ロンドンの建物の高さ規制に関する検討、協会保存運動など、多様な課題に積極的に関与した。しかし、一方で、大ロンドン発展計画の次の作業として1921年12月に開始されたロンドン中心部計画は、財政的な問題から、なかなか進まなかった。1928年の年次報告では、各レポートの礎としての重要性が再確認されたが、1930年の年次報告では、「適切なファンドで、大都市の再開発を導くことができる、実用的な価値のある何かを生み出す有能なスタッフを雇わなければ、こうしたプランはできない」²⁵⁾とされ、頓挫していることが報告された。しかし、都市計画の権限

が間もなく既成市街地にも及ぶようになるので、このような計画に再び着手する機会が訪れるだろうと結んでいた。

ロンドン協会は1920年代にもロンドンの様々な課題に関与していたが、中心部計画の頓挫が示すように、行政の補完という役割の内実は、次第に行き詰まりつつあった。

3-3 バーミンガム都市協会⁽⁶⁾

(1) 設立経緯と初動期の活動

『ロンドン協会雑誌』の1917年12月号には、ロンドン協会と同種の組織の設立がバーミンガム建築協会に提案されたこと、1918年4月12日に開催されたリヴァプール都市組合の運営委員会の議事録には、バーミンガムから二人の紳士が訪れ、協会設立の相談をしていったことが記録されている。こうして、先行する市民協会との関係をつくった後、1918年6月にバーミンガム都市協会が設立された。

会長にプリマス卿を迎え、28名からなる評議会、8名からなる技術委員会という構成をとった。評議会、技術委員会の委員でもあった名誉幹事のヘイウッドによれば、評議会は、会員数を増やすことよりも、まずは自分たちのチャンスや能力を試すという決定を早々に下した。その背景には、バーミンガム都市協会はバーミンガム公益ファンドからの毎年300ポンドもの資金提供による余裕があった。この資金で、協会の目的の達成に必要な土地を購入することができたのである。実際に1920年以降、公園や運動場用地を購入し、整備費とともに市に寄附する活動を行った。

設立翌年の1919年には、市の支援を受けて、ストリートアクセサリーの設計競技を実施したり、旧村落が残るノースフィールドで、都市計画スキームの制定に先立ち、市当局の協力を得ながら、集落の保存を前提とした開発計画案の設計競技を行った。ノースフィールドでは最終的には都市協会の技術委員会自体で提案をまとめ、市に提出した。

以上のように、バーミンガム都市協会は、有能な幹事、潤沢な資金、バーミンガム市との強い結び付きという幾つもの利点を有したかたちで活動を開始したのである。

(2) 芸術諮問委員会の設立

アメリカの芸術委員会をモデルとした審査機関設置の提案も、バーミンガム市との強い結び付きによって実現した。1922年6月に、バーミンガム市長を会長として、公共事業局長、教育委員会代表、大学教授、芸術学校校長、建築学校校長、建築協会会長、そして都市協会会長と名誉幹事のヘイウッドで構成される芸術諮問委員会が設置された。その役割は、市所有地に建つ建造物や、街路、広場、公園、彫像、モニュメントなどのうち、市関係当局によって芸術諮問委員会に提出されるものについて、レポートを作成することであった。芸術諮問委員会と都市協会と芸術諮問委員会との関係は「共感的独立」¹⁵⁾とされ、芸術諮問委員会は都市協会とは別に独自の年次報告書を刊行した。

(3) 事業の展開と先導的役割

バーミンガム都市協会は、1920年代には、市の公園委員会からの要求に応じて、リッキーヒルの整備計画やアストン公園の再整備計画を立案し、後者については市当局、そ

して都市協会自身の費用によって実現させた。更に、バーミンガムの中心駅であるニューストリート駅周辺の街路計画に対する提案、17世紀に建設されたストラドフォードハウスの保存への支援など、様々なプロジェクトを展開した。

こうした都市の物的環境の整備に力を入れる一方で、閉鎖予定であったレパートリーシアターへの支援(1923年~1924年)、バーミンガムスタジオオーケストラの人員削減の回避策の提案(1929年)、など、都市生活を豊かにするものであれば、空間整備に拘らずに活動を展開した。

バーミンガム都市協会は1923年の年次報告書で、協会の仕事が他都市の注目を集めており、同様の仕事を望む人たちからの相談をしばしば受けていると報告していた。そして、1924年設立のニューキャッスル協会など実際に同盟関係を結んだ都市協会が活動を展開していったのである。

4. おわりに

アメリカと違い、行政府の深刻な腐敗がなかったイギリスでは、地方貴族や名士、建築・都市計画等の専門家が上層部で運営を担った都市協会にはあくまで行政府の補完的機能が期待された。その補完とは市民意識を高め、地方分権を押し進めることであった。実際に運動を先導した市民協会の活動も、この理念を踏襲し、ローカルで、具体的な課題に集中し、行政への働きかけだけでなく、出版事業等で積極的に世論形成に取り組んだ。しかし、郊外地開発の都市計画スキームから既成市街地も含めた都市計画へという展開で、行政府が権限を掌握していくイギリス近代都市計画の成立過程において、行政府を先取りし、批判的対案提出も含めた自主的な都市計画的検討を特徴としていたリヴァプール都市組合やロンドン協会から、豊富な資金を有し、行政からの依頼を受けてデザイン審査、計画立案、整備までを行う後発のバーミンガム都市協会へと、先導的な都市協会の性格は変化していった。また、地域調査・計画運動やシティビューティフル運動といった都市計画の潮流、戦時体制下の社会状況などの時代的制約の中で、都市協会の役割が検討され、都市調査や芸術諮問委員会などの活動が生み出された。つまり、イギリス近代都市計画期は、都市協会にとっても、都市計画の展開や社会状況と直に関わりながら、自身の立ち位置、活動を模索する時期であった。

都市協会同士の関係では、リヴァプール都市組合とロンドン協会間の人的交流や他都市の都市協会設立を促すための共同企画、この両協会に事前相談した上でのバーミンガム都市協会の設立、3つの都市協会に見られた地方の都市協会に対する先導意識、具体の同盟関係などが確認された。イギリス近代都市計画成立期において、都市協会の活動は、ローカルに拘り、地方分権を推進するという共通の理念の下で、総体としては「都市協会運動」と呼びうる一つの萌芽的連携形態をとっていたと考えられるのである。

補注

(1) *Garden City* (1905年~1908年:『田園都市』) / *Garden Cities and Town Planning* (1908年~1932年:『田園都市及び都市計画』), *Town Planning Review* (1909年~:『都市計画批評』), *Journal of the Town*

Planning Institute (1923年~1971年:『都市計画学会誌』), *Sociological Review* (1908年~1952年:『社会学批評』) など。
(2) ロンドン社会学会都市委員会とビューティフル・オールドハム協会が共催で開催された。この会議では、地域調査の導入が強く推奨された。S. ブランフォードは、アパークロンビーらの協力を得て、会議後に、Branford C. and Farquharson A. (1924), *An Introduction to Regional Surveys*, The Leplay House Press) を執筆、出版した。
(3) このやりとりに関しては、(2005), 哲学, 114 (特集: 都市・公共・身体) の歴史社会学 都市社会学誕生100年記念, 慶應義塾大学三田哲学学会の「ゲデス・プロジェクト」に訳文が収録されている。
(4) 推測の根拠となる事実を幾つか示しておく。文献12)はリヴァプール都市組合の1920年5月15日の運営委員会議事録に、その別刷を会員に可能な限り配布することになったと記されている。文献14)は『ロンドン協会雑誌』の67号に全文転載された。文献15)に関する直接の史実は見当たらないが、この年のバーミンガム都市協会の年次レポートには、「われわれの出版物(注: こうした雑誌記事を含む)は多くのイギリスの都市でプロパガンダとして使用されている」とある。また、ヘイウッドがこの論説を発展させて翌年に『都市計画学会誌』で発表した論考は、バーミンガム都市協会の全会員に配布された。
(5) 1902年創立のビューティフル・オールドハム協会は、『田園都市』1(4) (1905年5月) や『都市計画批評』1(2) (1910年7月) でその活動が紹介された。後者では「他のまちの似たような協会の親的存在」とであると記されている。同協会は、イギリス近代都市計生成期の最古参の都市協会であった。『社会学批評』17(3)でも紹介記事がある。しかし、都市協会運動の中での先導性については、不明確である。
(6) リヴァプール都市組合の活動については、『田園都市』1(1), 2(18), 2(19), 『都市計画批評』1(1), 1(2), 1(3), 3(4), 4(1), 4(2), 6(4), 7(2), 7(3-4), 8(2) 掲載記事, 文献12), 13), 15), 年次報告(1915), 執行委員会・通常委員会議事録を参照して記述した。
(7) ロンドン協会の活動については、*The Journal of London Society* 各号の他、文献12), 13), 21), 『都市計画批評』3(1), 3(4), 6(2), 『田園都市及び都市計画』, 6(3), 10(10-11) 掲載記事等を参照した。
(8) バーミンガム都市協会の活動については、協会年次報告(各年度), Haywood W., (1946), *The Work of Birmingham Civic Society 1918-1946*, 文献15), 年次報告(1918-1920~1925-1926)等を参照した。

参考・引用文献

- 1) 中島直人(2008), 「シヴィック」の文脈 都市美運動の世界史からの考察, 『都市計画』, 57(6), pp. 25-28, 日本都市計画学会
- 2) 西村幸夫(1993), 『歴史を生かしたまちづくり』, 古今書院
- 3) 西村幸夫(1997), 『環境保全と景観創造』, 鹿島出版会
- 4) 中島直子(2005), 『オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動』, 古今書院
- 5) 中島直人(2009), 『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』, 東京大学出版会
- 6) Cherry, G. E. (1974), *The Evolution of British Town Planning*, Leonard Hill Books
- 7) Cherry, G. E. (1994), *Birmingham A Study in Geography, History and Planning*, John Wiley & Sons
- 8) Crouch, C. (2002), *Design Culture in Liverpool 1880-1914*, Liverpool University Press
- 9) The Civic Trust (1967), *The Civic Society Movement*
- 10) King A. M. (1987), *Urban Improvement and Public Pressure The Civic Society Movement c.1902-1930*, master thesis of Univ. College of London
- 11) 渡辺俊一(1985), 『比較都市計画序説』, 三省堂
- 12) Abercrombie P. (1919), A civic society An outline of its scope, formation and functions, *Town Planning Review*, 8(1), pp. 79-92
- 13) Branford S. (Mrs.) (1923), Civic revival an account of the progress of Civic Societies, *Sociological Review*, 15(1), pp. 41-47
- 14) Branford S. (Mrs.) (1923), Civic societies and their aims, *Sociological Review*, 15(3), pp. 247-249
- 15) Haywood W. (1923), The Birmingham Civic Society, *Town Planning Review*, 10(3), pp. 171-180
- 16) (1916), Civic Arts Association, Inaugural Meeting, *The Journal of the Royal Institute of British Architects*, 24(2), pp. 125-126
- 17) (1932), Report of work carried out by the City Guild, up to December, 1932
- 18) (1962), The London Society 1912-1962, *The Journal of the London Society*, 361, pp. 61-64
- 19) The Earl of Plymouth (1914), The London Society and its scheme for a development plan of greater London of the future, *The Journal of the London Society*, 5, pp. 1-5
- 20) (1915), Annual General Meeting, *The Journal of the London Society*, 7, p. 13
- 21) Webb, A ed. (1921), *London of the Future by the London Society*. T. Fisher Unwin Ltd.
- 22) (1921), Editorial The Future of London, *Town Planning Review*, 9(3), pp. 133-134
- 23) (1919), Affiliated Societies, *The Journal of the London Society*, 19, p. 9
- 24) (1929), *London's squares and how to save them*, The London Society
- 25) (1931), Annual Report 1930, *The Journal of the London Society*, 157, pp. 34-48